

農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 営農指導課 (072-444-8001)

# 営農インフォ

## 水稲

◆出穂期以後の水管理  
出穂前はやや深水管理とし、穂への養分供給を促す。長期間湛水状態になると根の活力が低下するので、出穂後は水深2cm程度の浅水にする。その後、穂揃い期に入ると間断かん水で根の活力維持と登熟歩合の向上をはかる。

### ◆病害虫防除

・ウンカ類  
9月上旬に田を見回り虫見板や黒い下敷きなどを使って稲の株元をはたき、1株に5頭以上のウンカ類を確認した場合は、トレボン粒剤(10a当たり2〜3kg)／収穫21日前まで／3回以内、トレボン乳剤(1000〜2000倍)／収穫14日前まで／3回以内)やアルバリン顆粒水溶剤(3000倍)／収穫7日前まで／3回以内)等を株元まで十分行き渡るように散布する。また、アルバリン顆粒水溶剤は、カメムシ類(2000倍)／収穫7日前まで／3回以内)、ツマグロヨコバイ(3000倍)／収穫7日前まで／3回以内)も防除できる。

・斑点米カメムシ類  
近年、アカヒゲホソドリカ

スミカメ(体長5〜6mm。体は細長く淡緑色。触角が赤い)、ホソハリカメムシ(体長9〜11mm。黄褐色。肩の部分が鋭くとがる)といったカメムシ類の加害による斑点米の被害が増加している。カメムシ類については、出穂後から乳熟期にかけてもみを吸汁されると斑点米の被害が出る。そのため、出穂5〜10日後にアルバリン粒剤(10a当たり3kg)／収穫7日前まで／3回以内)などを散布する。

カメムシ類は、畦畔や休耕田のいね科雑草から飛来してくるので、出穂後に畦畔雑草を除草すると、カメムシ類が水田内に移動する。よって出穂2週間前までは、ほ場周辺の畦畔や休耕田の雑草を除草しておく。

・いもち病  
常発田やいもち病の発生が予想される田では予防に努める。発生を認めたらブラシンフロアブル(1000倍)／収穫7日前まで／2回以内)等を散布する。乳剤やフロアブル剤等の散布剤を使用する場合は、風の強い日を避け、散布機の圧力を上げすぎない等、ほ場の周囲に飛散しないよう、注意して作業する。



### アブラナ科野菜(キャベツ、はくさい、なばな、こまつな、大阪しろな、チンゲンサイ)の根こぶ病対策

昨年根こぶ病が発生したほ場では、できる限り栽培を避け、アブラナ科以外の作物を輪作する。また、根こぶ病発生のあるほ場では防除を徹底する。防除は薬剤のみに頼らず、高うねにして排水を良くする、有機質資材を施用し土づくりを努める等、耕種的防除を心掛ける。

#### ◆薬剤による防除

- ①は種、または定植10日前までに石灰質肥料を10a当たり100kg、堆肥を2〜3t施用し、全面耕起する。乾燥時にはかん水する。
- ②は種、または定植前にネビジン粉剤を以下のとおり施用する。

表2.各作物のネビジン粉剤の使用量

作物名	10a当たり使用量	使用方法	使用回数
キャベツ	20〜30kg	全面土壌混和	2回以内
	20kg	作条土壌混和	
はくさい、なばな、非結球あぶらな科野菜類(こまつな、チンゲンサイなど)	20〜30kg	全面土壌混和	1回
	20kg	作条土壌混和	

◆ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科野菜類で登録がある。

◆肥培管理  
露地では秋雨の害が出やすいので、高うね栽培し、水はけを良くする。



### しゅんぎく(施設栽培)

#### ◆病害虫防除

葉の裏に白いカビの発生が見られたらべと病である。年により、激発することがあるので、換気に努め、Zボルドー(500倍)／(1)で早期防除を実施する(発病後の散布は十分な

効果が認められないので発生前から予防的に散布する)。マメハモグリバエは、ハウスでは収穫後にうね全面をビニールで被覆し、地表下の温度を上げて地中のさなぎを殺すことにより、高い防除効果が得られる。マメハモグリバエの登録薬剤については表3のとおりである。同じ系統の薬剤を続けて使うと抵抗性がついて効果が低くなるので、ローテーション散布を行う。

\*Zボルドーは、野菜類で登録がある。



## 野菜

### たまねぎ

◆は種  
は種日が早過ぎると「とうだち」や分球が多くなるので、は種適期を守る。主な品種のは種時期は表1のとおりである。

◆育苗  
本葉2枚頃までは乾燥に弱いので、10月中旬頃まで晴天の日かん水する。また、この時期は、苗立枯病が発生しやすいので、灰色かび

表1.たまねぎのは種時期

品種	は種日
七宝早生7号	9月23〜25日
アンサー	9月23〜25日
ターザン	9月25〜30日
もみじ3号	9月28〜30日
七宝甘70	9月30日(11月定植) 10月10〜15日(1月定植)

表3.しゅんぎくのマメハモグリバエに登録がある農薬

薬剤名【系統名】	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
カスケード乳剤【IGR系キチン合成阻害剤】	2000〜4000倍	収穫7日前まで／2回以内	100〜300ℓ／10a
トリガード液剤【IGR系キチン合成阻害剤】	1000倍	収穫7日前まで／2回以内	100〜300ℓ／10a
アフファーム乳剤【マクロライド系】	2000倍	収穫7日前まで／2回以内	100〜300ℓ／10a
ベストガード粒剤【ネオニコチノイド系】	10a当たり9kg(生育期株元処理)	収穫3日前まで／1回	-

※アフファーム乳剤、トリガード液剤は、ハモグリバエ類で登録がある。

## 果樹

### みかん 翌春の発育枝の確保

◆土壌乾燥  
品質の良いみかんを作るには、

\*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数)／使用時期／総使用回数 を表示しています。



病との同時防除をかねて、オーソサイド水和剤80(600倍)／収穫前日まで／5回以内)を散布する。

### 冬キャベツ

◆定植  
定植は9月中旬頃に行なう。苗は、育苗期間が約30日で本葉が5〜6枚の頃が適期である。定植が遅れると結球が悪くなるので、できるだけ若苗を使う。セル成形苗の場合は、同じ時期には種し、10日前後定植を早くする(本葉3〜4枚が適期である)。定植後は、活着するまで十分かん水し、植え傷みを防ぐ。



### こまつな

◆病害虫防除  
施設栽培で雨が多い場合には白さび病が発生しやすくなるので、ランマンフロアブル(2000倍)／収穫3日前まで／3回以内)等で発生初期に散布を行なう。

この時期に排水を良くし、土壌を乾燥させる。そのため、敷きわらを取り除き、土壌に日が当たるようにする。

### ◆病害虫防除

ミカンハダニに被害されると果実の着色が悪くなる。また、ミカンサビダニに被害されると「ちゃんぶくろ」と呼ばれ、果実表面が褐色でがさがさの状態になり商品価値が無くなる。被害が出てからの防除は遅いので、昨年被害の認められた園は、必ず早期の徹底防除を心掛ける。これらの防除には、8月下旬〜9月上旬にダニエモンフロアブル(4000〜6000倍)／収穫7日前まで／1回)を散布する。

黒点病は、秋雨前線が停滞し、雨が多くなる9月中旬頃から被害が増える。防除は8月下旬〜9月上旬に予防的にペンコゼブ水和剤(400〜800倍)／収穫30日前まで／4回以内)を散布する。

\*ダニエモンフロアブルは、かんきつで登録がある。

## いちじく

9月の重点管理は、葉の光合成を高め、貯蔵養分を高めることである。貯蔵養分が十分でない、来年の初期生育に悪影響を及ぼすこととなる。

### ◆枝葉の管理

果実の着色促進と葉によるすり傷防止のために行なう摘葉(軸は残す)は9月上旬までとする。それ以降は、十分に貯蔵養分を蓄えることができるよう摘葉は行なわない。

### ◆病害虫防除

長雨が続き、葉や果実に疫病が発生し、早期落葉や腐敗果が発生しやすい。発生した場合は園外に腐敗果を持ち出し、アミスター10フロアブル(1000倍/収穫前日まで/3回以内)を散布する。

### ◆秋肥の施用

みかん配合を10a当たり30~40kg施肥する。ただし、施肥量が多すぎると枝が遅伸びして貯蔵養分が消費されるため、枝の上位葉の状態を見て施肥時期、施肥量を判断する。



## もも

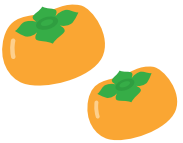
### ◆せん孔細菌病対策

降雨や強風により発生が助長されるので、天候の推移に注意する必要がある。9~10月に新梢に感染して越冬する。来年の感染源を減らすため、9月下旬~10月中旬にかけてICボルドー1412(30~50倍/—/—)を2週間程度間隔をあけて2回散布する。ただし、高温時の散布では、葉害が発生する可能性があるため使用しないこと。

## かき

### ◆カメムシ対策

例年被害が多い園地では、園内の観察をきめ細かく行ない、カメムシ類の発生を見かけたら、スカウトフロアブル(1500倍/収穫7日前まで/5回以内)、または、アデオオン乳剤(2000~3000倍/収穫7日前まで/5回以内)を散布する。



\*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。

## 健康百科

### 熱中症の予防

「暑い季節には熱中症になりやすいといわれますが、その予防について教えてください」との問い合わせが多くなります。

特に気を付けなければいけないのはお年寄りです。お年寄りは、屋外だけでなく、室内にいるときでも熱中症を起こしやすい、しかも症状が重くなりがちだからです。

熱中症の症状は、軽い方からいうと、目まい、立ちくらみ、さらに進行すると、吐き気、体がだるい、さらに進むと、ふらふらする、立てない、意識障害などです。必ずしもこの順で起こるわけではありませんが、発症したときに、すでに進行していることがよくあります。暑いときに少しでも体調がおかしいと感じたら、まず熱中症を考えてください。

熱中症を起こしやすい原因としては三つあり、まず体温調節機能の低下です。暑いときには末梢の血管を拡張させて体温を調節するのですが、その働きが低下するからです。

二つ目は、筋肉や血流量の減少により、体全体が慢性的な水

佐久総合病院名誉院長 ● 松島松翠



分不足の状態になっていることです。

三つ目は、暑さや喉の渇きを感じにくいいため、暑さへの対処が遅れたり、水分補給が遅れがちになったりすることです。

予防法は、まず室内が高温多湿にならないように、換気などに注意します。必要があれば、冷房も適宜使用しましょう。また外出時には、通気性や吸気性の良い衣服を着て、全周につばの付いた帽子や日傘で直射日光を遮ります。

喉の渇きを感じなくても、小まめに水分や塩分を補給することが大事です。それにはお茶と梅干し、あるいはスポーツドリンクなどが適しています。

ただし、アルコール飲料やカフェインを含む飲み物には、利尿作用があるので水分補給には向きません。